

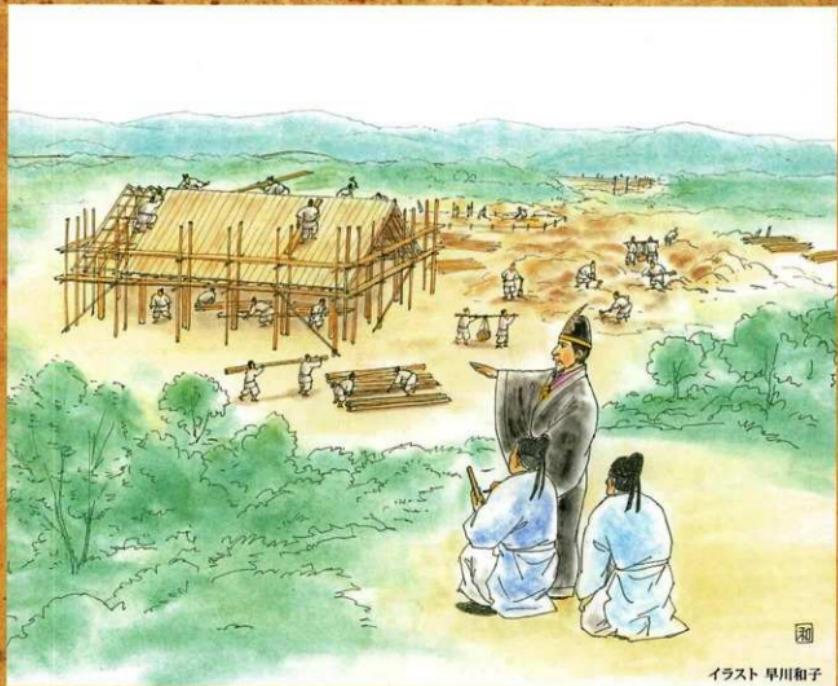
ここまでわかった  
鞠智城

第6号

鞠智城の変遷

飛鳥時代から平安時代中期まで、  
約300年間存続した鞠智城が  
果たした役割、機能の変遷などについて  
紐解いていきます。





国

イラスト 早川和子

鞠智城の築造時期は、  
663年に起こった白村江の戦いの後の  
7世紀後半と考えられます。  
それから約300年間存続した鞠智城は、  
その機能や役割の変遷などから、  
5つの時期に区分することができます。  
ここでは、鞠智城の時期ごとの  
特徴についてみていきます。

# 創建期

7  
第世  
4紀第  
四半期  
半期

## 鞠智城Ⅰ期

軍事拠点としての最低限の機能が緊急的に整備された。

この時期は、鞠智城の創建期にあたります。朝鮮半島南西部で起こった「白村江の戦い」での敗戦の後、唐・新羅の連合軍の侵攻に備えて、他の古代山城とともに鞠智城が築造された時期です。鞠智城の創建については、「続日本紀」の文武天皇2(698)年5月条に、大野城、基肄城、鞠智城の3城を修復したという記事があることから、665年に築造された大野城、基肄城とほぼ同じ時期に築造されたと考えられます。

この時期に鞠智城では、深迫・堀切・池ノ尾の各城門や南側・西側土塁線を含む外郭線が構築され、城としての機能が急速に整備されました。また、城内には、長者原地区の長者山山頂部から長者山東側裾部一帯、長者原地区中央部高台にかけて倉庫や兵舎に使用されたと考えられる掘立柱建物群が建造され、城域北側の谷部には貯水池が造成されました。

この時期に、城としての主たる施設が整備されていましたが、建造された掘立柱建物の構成は多種多様で、総柱の倉庫が少なく、小型の側柱建物が多い傾向にあります。これは、外郭線を急速に整備する一方で、城内施設の整備までは十分に手が回らなかったためだと考えられます。

650年



■ 鞠智城Ⅰ期の建物  
(16号建物跡/兵舎として復元)

16号建物跡は、長者原地区の中央部北側から検出された掘立柱建物跡で、梁行3間(7.8m)、桁行10間(26.5m)の建物の壁部分だけに柱がある大型の建物跡です。現在、兵士が寝泊まりしていた「兵舎」として建物を復元しています。



■ 貯水池跡

貯水池跡は、長者原地区北側に位置する谷部で確認され、発掘調査によって総面積約5,300m<sup>2</sup>の大きな貯水池であることが判明しました。池内部からは、建築部材等を保管する貯木場などが確認されたほか、木簡や銅造菩薩立像などの重要な遺物が出土しています。



■ 池ノ尾門跡

池ノ尾門跡は、確認された3ヵ所の城門のうちの一つで、西側土塁線と南側土塁線に挟まれた谷部に位置します。発掘調査によって、谷部を塞ぐように造られた石塁や城内の水を城外に排水する暗渠状の通水溝、門礎石などが確認されています。

# 隆盛期

698年  
8世紀  
紀末  
第1四半期前半

## 鞠智城Ⅱ期

城を管理する建物や八角形建物など  
城内の施設が最も充実した時期

この時期は、鞠智城の隆盛期にあたります。長者原地区東側から上原地区北側一帯にかけて、「コ」字形に配置された掘立柱建物群や縦柱の倉庫群が出現するなど、建物の配置に大きな変化が生じています。また、南北に配置された2棟の八角形建物が出現するのもこの時期です。これらの時期は「続日本紀」に記載されている鞠智城の修繕の時期にあたります。

「コ」字形配置の建物群は城の管理・運営を司った中枢施設と考えられ、城内施設の充実が最も図られ、城としての機

能が十分整ったのがこの時期です。また、日常生活に用いる土器の出土量が最も多い時期でもあり、施設の充実が図られるとともに、城の管理や運営に多くの人員が配置されたことが推測されます。

出土した土器の大半は須恵器ですが、これらの須恵器には、福岡県大野城市一帯の牛頭窯跡群のものや、熊本県宇城市周辺の宇城窯跡群で製作されたものが認められます。また、一部認められる土師器には暗文と呼ばれる文様が入る畿内系の土師器があることも特徴としてあげられます。

698年  
鞠智城を修治(修繕)



■ 土壘



■ 八角形建物

(左:八角形建物跡検出状況 右:復元された八角形鼓樓)



土壘は外部からの敵の侵入を防ぐ城壁で、鞠智城では城の西側と南側で確認されています。この土壘は、性質の異なる土を交互に積み上げて叩き固めることを何度も繰り返すことで強固な壁をつくる「版築」という大陸伝来の技術で築かれています。

平面八角形を呈する八角形建物跡は、建て替えを含め南北2ヵ所から計4棟が見つかっており、日本の古代山城では唯一の検出例となります。南側の八角形建物跡は、心柱を中心に8本の柱が三重に巡る構造をしていました。現在、この南側の八角形建物跡を、鼓の音で時を知らせたり見張りをしたりするための3階建ての「鼓楼」として復元しています。

# 転換期

↓ 8  
8世紀  
紀第1  
3四半期  
四半期後半

## 鞠智城Ⅲ期

礎石建物が建てられはじめるなど  
建物の様相に変化が見られる。

この時期は、鞠智城の転換期にあたります。建物の配置についてはこれまでの時期を踏襲しながらも、長者原地区東側一帯において掘立柱建物が小型礎石を使用した礎石建物に建て替えられるなど、城内で初めて礎石建物が出現します。

礎石建物への構造的な変化は、建物の耐用年数を長くするためと考えられることから、長期にわたる城の存続を意図していたことがうかがえます。しかし、この時期に該当する土器はほとんど出土してい

ません。このことは、城の維持・管理に必要な最低限の人員のみを配置するなど、鞠智城における人員配置に変化が生じたためとも考えられます。

また、貯水池跡から出土した荷札木簡はこの時期のものと考えられます。この木簡と同じ形状のものは、大宰府が管轄した西海道の範囲や、平城宮跡で出土する西海道関連の木簡にみられることから、鞠智城はこの時期も大宰府の管轄のもとに維持管理がなされていたと考えられます。

750年



■ 49号建物跡  
(礎石建物跡)



■ 63号建物跡  
(掘立柱建物跡)



■ 木簡

長者原地区の西側に位置し、鞠智城Ⅲ期に出現する礎石建物です。他の礎石建物よりも規模が大きく、梁行3間(7.2m)、桁行9間(21.6m)の総柱の建物になります。長倉と呼ばれる倉庫であったと考えられています。

鞠智城Ⅱ期からⅢ期にかけて存在した掘立柱建物跡です。梁行3間(5.85m)、桁行7間(16.8m)の規模を有し、隣接する66号建物跡などを併せて、役所的な機能を有していた建物群であったと考えられています。

貯水池跡から出土した木簡で、「秦人忍□五斗」という文字が書かれており、秦人忍という人物が税として納めた米に付けられた荷札と考えられています。上部には左右からの切り込みがあり、この形状は九州の木簡に多く見られるものです。

# 変革期

8  
9世紀  
紀第4  
3四半期

## 鞠智城IV期

礎石建物が大型化。食糧等の備蓄施設としての機能が大きくなる。

この時期は、鞠智城の変革期にあたります。長者原地区東側一帯において、鞠智城Ⅲ期の小型礎石を使用した礎石建物から大型礎石を使用した礎石建物への建て替えが行われるなど、建物の大型化が図られており、この時期には、米などを納める倉が多く建ち並んでいたと思われます。また、側柱を掘立柱とする特殊な礎石建物が出現する一方、「コ」字形配置の建物群が消失するなど、建物の構成に大きな変化が生じています。

このような変化は貯水池の構造においても認められ、貯木場を含む池の南側半分が放棄されて埋没が始まるのもこの時期からになります。また、この時期の終わ

り頃には、池ノ尾門の石壘の崩壊も生じているようです。この時期の礎石建物には、多くの礎石に火災痕跡が認められることが特徴としてあげられますが、これは『日本文徳天皇実録』天安2(858)年条の不動倉11棟の焼失記事との関連が指摘できます。

この時期は、建物構成の変化、貯水池機能の低下など、城の機能が変容した段階であり、特に食糧等の備蓄施設としての役割が大きくなったものと考えられます。また、土器についても、8世紀第4四半期に須恵器が一部に認められるものの、そのほとんどが土師器であり、在地色の強いものとなっています。



■ 鞠智城IV期の建物  
(20号建物跡/米倉として復元)

20号建物跡は、長者原地区の中央部東側から検出された礎石建物跡で、梁行3間(7.2m)、桁行4間(9.6m)の総柱の建物跡です。火災によって焼失した可能性が高く、西側からは瓦片が集中的に出土しています。現在、米を保管した「米倉」として建物を復元しています。

850年

858年  
菊池城院の  
兵庫の畠が自ら鳴る  
同城の不動倉(米倉)が  
11棟焼失する。



米倉に米を運び入れる様子

イラスト 早川和子

# 終末期

10世紀第43四半期

## 鞠智城V期

食糧等の備蓄施設として存続、しかし、10世紀中頃には城としての役割を終える。

この時期は、鞠智城の終末期にあたります。この時期には、鞠智城IV期に起こった火災による建物の焼失などで城内の礎石建物数が減少するなど、城の機能が著しく低下しています。しかし、新たに大型の礎石建物などが建造されるとともに、貯水池の北側半分も機能していることから、城が存続していたことがわかります。

この時期に新たに建てられた建物は倉庫と考えられますが、礎石建物の倉庫が焼失した後に、大型の礎石建物の倉庫を建て直していることから、この時期の鞠智城はIV期に引き続き、倉庫群が建ち並ぶ食糧等の備蓄施設としての機能

がその役割の中心であったと考えられます。廃城時期については、貯水池が完全に機能を停止する10世紀第3四半期頃と考えられます。

『日本三代実録』には、元慶3(879)年に「肥後國菊池郡城院の兵庫の戸がおのずから鳴る」という記事があります。この記事に出てくる「院」は古代の役所などに付随する大きな建物のことを示します。この菊池郡城院の「院」は、鞠智城V期の大型礎石建物のことを示しているものかもしれません。この記事が鞠智城に関する最後の文献記録となり、鞠智城もこのV期を最後に廃城します。

879年  
菊池郡城院の  
兵庫の戸が自ら鳴る

950年



不動倉11棟が火災で焼失

イラスト 早川和子



■鞠智城跡出土の炭化米

鞠智城IV期の米倉と考えられる礎石建物の周囲からは炭化米が多く出土しています。これは、鞠智城の米倉が焼失したとする『日本文徳天皇実録』の記載を裏付けるものと考えられます。

鞠智城はⅠ～Ⅲ期にかけて軍事施設としての機能をもち、  
Ⅳ期以降は食糧等の備蓄施設としての機能に転換していった。  
約300年間の長きにわたって鞠智城が存続したのは、  
Ⅲ期からⅣ期にかけての機能変化によるものといえる。

### ◎ 鞠智城変遷表

年代	鞠智城の変遷	関連事項
7C 3	鞠智城Ⅰ期 推立柱建物の建築 城門の構築(深池・堀切・池ノ尾門) 野水池の造成 土壘の構築	白村江の敗戦(663) 防人・烽設置、水城築造(664) 長門国城築城(665) 大野・様城築城(665) 金田・屋崎・高安城築城(667)
4		
	鞠智城Ⅱ期	
8C 1	建物配置の改変	高安城廢城(701)
2	磚石建物の出現	備後国茨城・常城停める(719)
3		
4	鞠智城Ⅳ期 磚石建物の大型化 池中心部廃絶	肥後國が大國に昇格(795)
9C 1		
2		
3		
4	鞠智城Ⅴ期 磚石建物の再建	菊池城院、兵庫鼓鳴、不動倉11字火(858) 肥後國山本郡設置(859) 鞠智郡城院、兵庫戸鳴(879)
10C 1		
2		
3		
	廢城	

### ◎ 建物の変遷



この電子書籍は、ここまでわかった鞠智城 6 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：ここまでわかった鞠智城 6 鞠智城の変遷

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2002 年 8 月 18 日